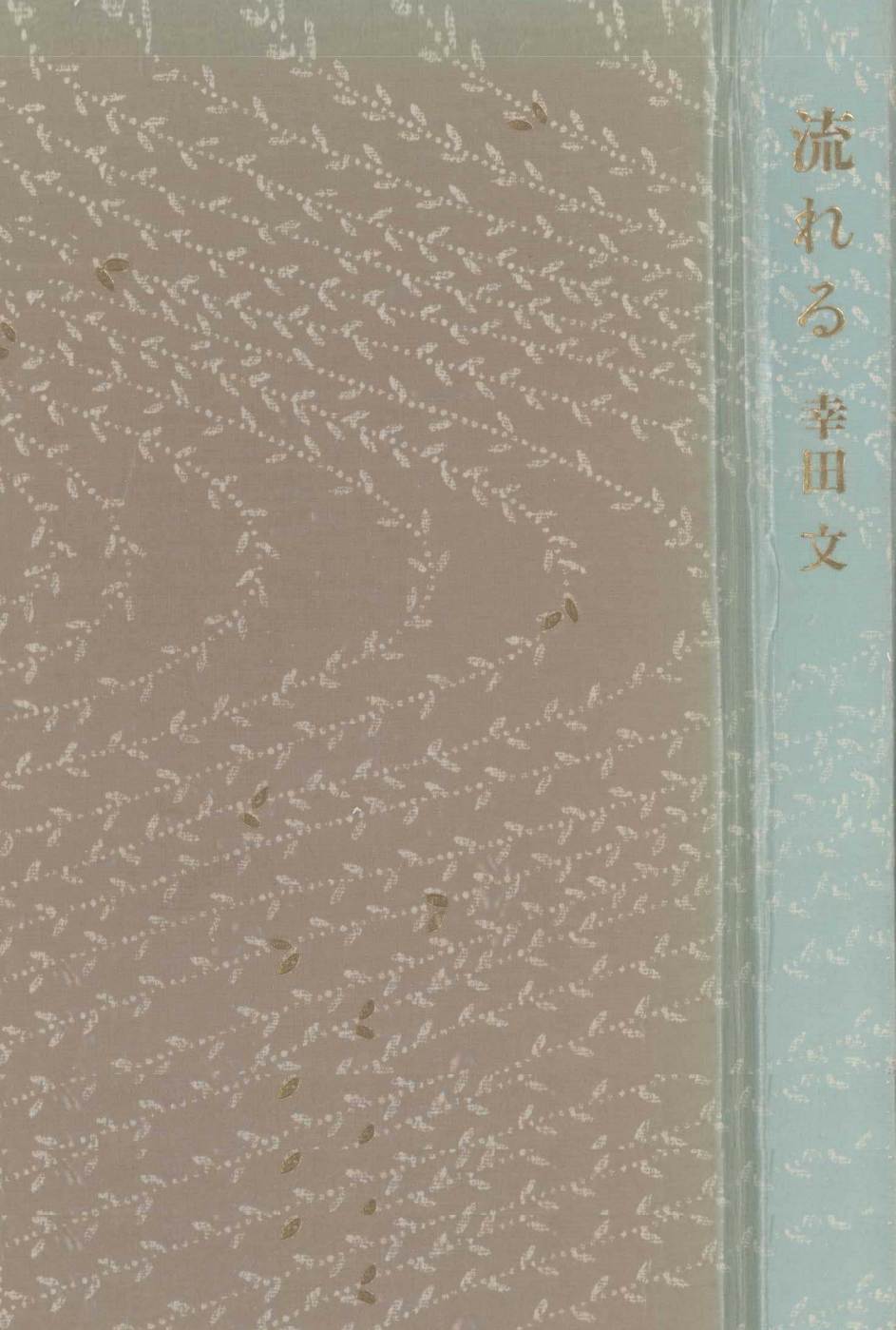


流れる
幸田文



流
れる
幸
田
文





流れる

平成五年六月二十五日 発行
平成五年七月二十日 二刷

著者 幸田 文
こうだ あや

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

住所 〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
振替東京四一八〇八 電話 営業(三三六)五二二
編集(三三六)西二

印刷所 株式会社金羊社

製本所 加藤製本株式会社

凡丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格は函に表示してあります。

流
れ
る

このうちに相違ないが、どこからはいっていいか、勝手口がなかった。

往来が狭いし、たえず人通りがあつてそのたびに見とがめられているような急せいた気がするし、しようがない、切餅のみかげ、石二枚分うちへひつこんでいる玄関へ立つた。すぐそこが部屋らしい。云いあいでもないらしいが、ざわざわきんきん、調子を張つたいろんな声が筒抜けてくる。待つてもとめどがなかった。いきなりなかを見ない用心のために身を斜しやによけておいて、一尺ばかり格子を引いた。と、うちじゅうがびたつとみごとに鎮しずまつた。どぶのみじんこ、と聯想れんそうが来た。もつとも自分もいつしよにみじんこにされてすくんでいと、

「どちら？」と、案外奥のほうからあどけなく舌つたるく云いかけられた。目見えの女中だと紹介者の名を云つて答え、ちらちら窺うかがうと、ま、きたないのなんの、これが芸者家の玄関か！

「え？ お勝手口？ いいのよ、そこからいいからおはいんなさいな。」同じその声が

糖衣を脱いだ地声になっていた。一ト坪のたたきに入り乱れた下駄と仔犬こいぬとそれの飯碗と排泄物はいせつぶつと、壁ぎわにはこれは少しものいい大きな下駄箱を据えてある。七分に明けてある玄関のしきり障子は引手から下があらめ、みたいに裂けて、ずっと見通す廊下には綿ほこりがふわふわしている。鎖を引きずって排泄物を掻きちらしながら、犬も愛敬顔あいきょうがで出て来たし、待機していたように廊下へ向いた手前のと次のと二夕間の障子がいっしよに明いて、美しく粧けいった首が二ツつき出た。

「おねえさん、見たところじゃよさそうよ。」すばやく、しかし十分に検分が済まされたようだった。

廊下でおじぎをし挨拶を云っていると、へんにぎごちない。多少の抵抗は覚悟していたが、しろうとということがこんなにひけめだとは思いがけなかった。心細くぼつんと、ちがつた水のなかに囲まれたという思いである。「あ、そう、そう」とうけこたえするのは一人だけ、他の四人は透視でもやっているように、ただじつとこちらを観察していた。主人は幅のたつぷりしたからだへ彩いろの多い着物をやつと纏まといつけているといったようすで、鍔瓶つるびんに片手をかけていた。厚いという感じだった。

「しろうとさんね？」——だめか、とかんぐった。「しろうとの人でもいいのよ。しろうともくろうとも、たべて働いて寝て、……つまり家事雑用はどこでもおんなじなもの。」つまり家事雑用が珍しい響で聞えて、すこし気楽なものがこちらの堅くなったしろうと、臯

さへ緩く浸みてきた。「まあ、いてみたら？　どっちかって云うと、若いのよりあんたみたいなとしよりのほうがいいのよ、ものを知ってるからね。」

「おかあちゃん何云うのよ。わるいわとしよりだなんて。しろとさん驚いちゃうじゃないの。」火鉢の向うにいる紅い羽織がそう云った。さつき覗いた首の一ツだ。

「いいじゃないの。あんた気に障つたらごめんなさい。この土地じゃもう三十になると誰でもみんなばあつて云われるんでね。」若い人は惜しげなく使えるがとんだ、としよりは一応できるから任せておけるが使いにくい、用事は煮炊きに掃除に洗濯だ、つまり家事雑用だから、重労働だの特殊勤務じゃないと云う。

「お使いづらいと存じますが、どうかひとつ、……どちらさまでも方々で齡とりすぎているとおっしゃられます。」

「おねえさん、このひと口利けるわよ、ことばちゃんとしてるもの。」見たところよさそうだと云った妓がつぎの部屋から、じつと觀察の結果という口ぶりで云う。

「そうよ、あんたじゃあるまいし。だけど、……方々ってどこへ行つたの？　角の松の家さんじゃない？」

「は？　いえ、あの、こちら方面じゃございません。」さすがにくろうとはうまいもんだと思う。どこを方々歩きまわつて来たのでもかまわないと云つてくるくせに話をぐるりと一トまわりさせて、その方々がどこどこだか白状させるように水を向けてくる。会社の寮母、

掃除婦、主婦代理というへんな人のうち、それから牧場風健康的職業と銘うった犬屋勤めの名犬どもの食事係、——犬には若すぎて惜しいと云われたのだ。犬にでもいい、若いと云われればそれだけでも張りあいを持てたのでだんだん話を聴いてみると、名犬は感情が発達しているから気分がわるければ食事婦なんか平気で食いつく、こちらは食いつかれっぱなし、それで給料は犬の食事の何分の一と聞いて、「それ以来すっかりがっかりしてしまいました」と話す。

紅い羽織と卓を隔てて、黒の一ツ紋を着た、かけ値なしの美人がいた。客らしい。「あなた、働きに出たのはじめてなのね。」

「はい。」

「この土地に知ってる人でもあるの。」

「いいえ。」

子どもは、親は？ と訊くのに、主人とかつれあいのことは訊かない。ずっと働く気かなどと、ここのうちの人でもなさそうなのにしつこく云う。そこへ主人が慌てたように、さびた声で割りこんだ。「とにかく働いてもらおうじゃないの。」

黒い羽織のひとは薄い細い手のひらを手焙りにかざしていた。よくしなないそうな指だった。

「米子。そこの押入のなみ江の荷物、もっと奥へ押しこんでくれない。明いたあとをこの

人のものを入れるようにして。」

米子は云われたことをしようとししないで、襖ふすまぎわにぼやつと突つ立っている。着物も器量も際立って落ちているが、唇がきれいに塗つてある。

「なんて名？」

「梨花りかつて申します。」

「りか？ 珍しい名だこと。異人さんのお宗旨名？」

「は？」

「いえ、耶穌やそのご信心だとそんな名つけられるつて話聞いてたから。どんな字かくの。」

「梨の花とかきます。」

「へえ、梨の花！」若いのが噴きだした。たぶん四十すぎの女中に花がおかしいんだろう。どこへ行つてもこの名がひつかかつて笑われるが、笑われる名がついていることはなんて好都合なんだろう、劣等視の笑いを受けるのは親近感が生じることなのだ。

米子は足をつかつてなみ江の行李こうりをずるつと一尺ばかり突つこんで云う。「ここ自分で掃除してつかえばいいわ。」

そう云うわけがすぐ呑みこめた。おそろしく鼠臭く、また実際点々と黒く散らばつてゐるのがあった。目見え女中のために鼠の掃除なんかいやなのである。

「ねえ、ちよいと梨花さんっていうの呼びにくいわ。せんのひと春さんだったから春はど

う？」もちろん主人の御意のままである。符牒ふだうは通りのいいほうがいい。

米子はぷいと出て行って、いまの押入を斜にきる梯子はしご段を、不機嫌をろ骨に見せてどきどきとあがって行つた。壁のどこから砂がこぼれ落ちるらしい微かな音が押入の敷紙へさらさらと云つた。

「ふふふふ。失礼しちゃうわね。」ふりかえると、あの舌つたるい声を出した現代ふうの妓こが、ずっとならんだ鏡台のいちばん大型の和風三面鏡へ背なかをもたせて、にやつと二階をしゃくつて見せ、ちいさな声で、「ヒステリーと鼠のくそと関係があるのかしらね」と云い、大きな声で、「あたしな子つていうの。よろしく」と云つた。

隣から主人が、「なな子ちゃん、うちじゅう案内してあげてよ。」

「はあい」と大きく、「案内が聞いてあきれるご邸宅」と小さく、「そこお手洗、こつち台所」と大きく、「あんたきたないの平気？ それ平気でないとお勤まらないわよ。ほらね、実際にたない台所ですよ。でもあたしのせいじゃないわ、あたし通いだもの、台所の世話にはならないのよ。あの米子のやつ、まったく無精だ」と小さい。香水のいい匂いが導いて、なるほどうちじゅうの案内は詳細に陰陽両面に悉つくされて、二階へだけは残した。

なな子は人さし指を立てて茶の間を指し、それを口へ壁かきにあてて見せて、「二階はね、おねえさんと勝代さんのお寝間。勝代さんあんなに不器量で似てないけど、おねえさんのほんとの子よ。きょうはもう、ほら、いま米子があがつてつてお床のべてるわ。だからあん

た行かなくてもいいの」と、ぎゅうつと片眼をつぶる。つけ睫かとまちがえるほど長い睫だ。「なんでもないんだけどね、当分あなた二階へ行かないほうが利口なのよ。なあんでもないことなんだけどね。」全然なんのこともかうけとれなかった。

奥では主人と紅い羽織黒い羽織がしらじらとしていた。「今度こそはつきりしてもらわなくっちゃね。あのほうはあさつて、荷物はしあさつて、無理な話じゃあないでしょ。それともなんだったら、誰かあいだへ立てようか」などと云うのが聞える。

手のひらの薄い美人は雪丸さんというのだそう。主人のかさにかかった云いかたにもおとなしい挨拶をして起ちあがった。うろうろしている梨花に、「お折角お勤めなさい。あたしまた寄せていただきますが、そのときに又ね。」

雪丸さんの履物を揃えようとしても、乱雑などれがそれか見当もつかなくて、とにかく一足ずつにと、あがり板へつくばつて纏めていれば、仔犬は小便を踏みたたくった肢でその肩へ乗るかかつて親愛を押しつける。雪丸さんはひとりで踏板のずつと奥から豪勢な革草履を出して、格子の外でもう一度会釈して行つてしまった。ひやびやとした顔だちにも云いたげな感情があり、なにかは知らず悲劇が匂つているように見え、悲劇的なところに芸者が感じられた。締めあました格子の隙から風と犬の臭さが吹きつけて、すでにたそがれだった。雪丸が置き去りにのこした哀感にしろ、うと女中はちよつとの間まどわされ、それから犬のくその中にたくさんの白い蛔虫を見、毛の薄い腰の落ちた白犬がぶるぶる顫

えているのを見、なぜともなく、ここにいつくことになりそうだと思った。

こういうところは新しい女中に新しさのゆえの遠慮などをもたないようだった。そのつ、まり家事雑用が会釈もなくさざざとかわせられてきた。炭を出せ、たばこを買って来い、急須を洗え、晩のおしたくは肴屋へ行って、ああそれよりさきへ洗濯物を取りこんで、雨戸を締めて、そうだ、猫にごはんをやつて、といったぐあいである。遠慮がないと云えば、なな子さんも犬もたちまち友だちづきあいだし、米子は中古細君みたいに平気で不機嫌を見せつける。女中など目見えでも古くても使うだけ得といったようである。雑用のあいまに頻繁に電話が来る。電話には出なくとも、「今晚は」と人が来れば、立つて行かないわけにもいかない。ところが、どの人も取次よりさきに勝手にひとりぎめで茶の間へはいつてしまう。みんなが梨花を一応注意し、そして黙殺した。梨花も小腰だけはかがめておいて、同じく対手を一応検分し黙殺した。「今晚は」とト一言云うだけで、他人のうちとわが家とのさかいもなく、ずるずる出たりはいったりする締りのなさは、そういう習慣のないものにはなにか暗示的におもわれた。ずるりとはいることはおもしろい。

「ちよいと、あの、なんていったつたけね、梨花か、……どうもじれつたい名だね、女中はこうすらつとした名のほうがいいんだが。春さん！」けわしく呼びたてられて行ってみると、笑顔がゆつたりと優しいから不思議だ。とつさに気がかわるのか、ああいうじれつたい物云いにこういうのどかな顔が飾つてあるのか、一時間か二時間にしかないくろう

と衆の世界だ、わかるはずはない。と思うものの、はや梨花の性癖が頭をもちあげていた。――わからないはずはない、と挑んで行くような気になっているのである。相かわらずどこへ置いても自分は強いと、ひそかな得意があった。

「お風呂何分で沸くかしら。」毎日つかっているであろう風呂の沸く時間を、いま来たばかりの女中に訊くのである。

「さあ四十分くらいなものでしょうか。」でたらめである、ひとのうちの風呂だもの。

「四十分ならそれでもいいけど、もつと早くできない？　三日もまえからのお約束なんだから、風呂が焚けないから後れちゃった、じゃ恥なのよ。まああんたにはわからなくともしょうがないけれど、お座敷ってそういうもんなのよ。」

ここしばらくは焚いたようすはないきたなさである。恐る恐る簀の子に降りて注意すると、はたして鼠のしわざがあったが、なにしろ急いている、いい加減なことしておかなくては間に合わない。風呂場になみ二人分の風呂桶を置いたというより、なみ二人の風呂桶をかこつてわずかに三尺の流しを置いたと云うほうがいい。すべて寸法外れのまま形にした湯殿である。明けたことのないらしい錆びついた羽目の小窓を明けて見ると、眼のまえ三寸ばかりに隣のしたみが立っている。電燈がやけに明るく、片おろしに流れた天井板がたしかにどこかの剝しものに相違ない、釘の穴が黒いし、みになって整列している。天井からは万能干し器が骨ばかりの傘のように吊りさがって、からからに乾いた足袋が片ほう、

肌襦袢はだじゅばんにかける緋縮緬ひぢりめんの襟えりがだらんと萎なえてゐる。なんにしてもみごとと云いたい狭さだ。狭いということは乏としさを指すことがしばしばだが、こう利口につかつた狭さにははみ出す一步手前の、極限まで詰つた豊富さがある。戦後急激におちぶれて、とうとう畳一枚も持てなくなつた現在までに、梨花はそれ相応のいろいろに貧しい狭さを経験しているが、やつとこのごろは狭さというものはつきり知つた。狭いということは結局、物なり人間なりがあるということなのだ。何かがあるから狭さもあるので、人も物もないとき狭いという限界はない。

焚き口へ出るには是非とも四畳半を通りぬけて、雨戸のそと畳一畳ほどの空地あきちへ降りなければならぬ。当然のことながら焚き口は羽目に接触しているし、羽目には申しわけにトタンが張つてあつたがもう古く、はじいてみると弾力のない音がした。烟突えんとつのほうは風呂場のなかから天井を抜いていて、しつかりしたためがね石が入れてあるのを油断なく見ておいたが、隣の羽目は三寸しか離れていない。ここで火を焚くことの不用心さは冒険だと云える。空地いっぱいにはなんのためか紙屑かみくずを詰めた林檎箱りんごばこが重ねてあり、その上へその上へと棄てる紙屑が盛りこぼれている。どう見てもあぶなかつたが、かつかと燃せばこの紙屑は火の粉一ツでも火を引くだろうし、とろとろ燃していればお座敷ざしきとやらの間にあわないだろう。梨花は設備の不完全さをごたごた云うつもりはない。が、女中の最初の困りかたがこんなふうに現われたのだなおもう。奇蹟きせきのように明いているこの畳一畳分の空

地から仰ぐと、星が白く高く、夜はすぐそこ、隣の物干しに残ったパンティへまで低く降りていた。

「ねえ、あんた、いつ来たの？」殺した声が物干しから話しかけて来た。

なにかは知らずこつちも憚り声で、「——さっき。」

「ふん。こわいよ、気をつけるんだね。あぶないって話だから。」——同類の女中と見た。「ええ、心配なんです。なんだか燃えつきそうで。」

「ばかだね、しろとだよこの人。風呂なんかじゃないよ。そんな風呂なんか焚かなくていいんだよ。よく燃すもんあるね。」まだ若い子だった。

とたんに、ぎゃあと頭のうえで猫の戦闘合図があった。猫の嫌いな梨花は本能的に爪を感じて身をしずめた。どすどすという喧嘩になつて、トタンがごぼごぼと鳴った。小動物どころではない凄まじさに、こらえかねて退却の用意に四畳半の障子を引きあげると、「猫だよ、驚かせるねえ。」——いつ来たのか、若くもないとしよりでもないらしい女が、肌をくつろげて襟おしろいをしていた。

「春さん、猫嫌いらしいね。」今つけられた名までもう知っている。あつけにとられるような速さである。これは用心しなくてはいけない、スピードの目盛が一ト桁高いという恐れをもたされる速さである。そして又なんと、新しいということは逸早く古くされてしまう世界だろう。だれもが古さと新しさとのあいだに何の抵抗ももっていないらしい。だから

ら梨花のきよう来た新しさは、いまはもう隣の女中にもこのとしまにも、数年なじみの古人同様に扱われているという気がする。

猫はぎやぎやと一トきわけたたましく、一方はどこかへ墜落し、一方は力足を踏んでごぼごぼと凱旋がいせんして行つた。

「今の、ポンコじゃない、春さん？ ポンコでしょ、染香そめかさん。」主人が出て来る。

梨花はまだポンコに見参してないから返辞のしようもないが、染香さんは頭のいい返辞をする。「さあ。……のようでもあり、ようでもなし。おねえさん、わかりませんよ。あたしや三味線はひくけど猫の声にやからきし耳があいてないんでね。」

主人のさびた声が謂いわゆる猫撫ねなでに一段と声こゑづくつて、「ポンコ、ポンコ」と呼びたてると、風呂と隣の三寸のあいだから、哀しく甘つたれが応えた。花柳界はみんな裏表二タ通りに訓練された声をもつてゐるんだろうか。なな子さんも主人も二タ通りの声だし、猫も戦闘用絶叫と愛玩物的嬌声あいがんぶつ きようせいがある。絶叫と嬌声のあいだにはたぶん欠如した音階があるはずだ。

主人は表からまわつて隣の袋物職のうちへ猫貰いさげに、あたふたと出て行つた。梨花は思ひきつてばけつに一杯の水を羽目へぶっかけておいて、火を燃しつづける。薪がぴしぴしとはぜる。

「ちよいと春さん、よけいなこと云うけど、その燃し場気をおつけ。あたしやとうからひ